



## お知らせ

### 5月19日(土) 例会

- ・午後1時～4時半 八千代市立郷土博物館にて
- ・大和田新田調査研究分担・資料学習
- ・郷土史研通信 58号発行

### 6月16日(土)～17日(日) 一泊旅行見学会

= 甲府盆地の古代から近世の歴史探訪 =

6/16 勝田台北口6:45集合 = バス = 釈迦堂遺跡博物館 = 山本勘助の墓 = 風林火山館 = 武田神社 = 舞鶴城址 = ホテル神の湯温泉  
(tel 0551-28-5000)

6/17 甲斐の善光寺 = 信玄堤 = 県立考古博物館 = 県立博物館 = 勝沼・ぶどうの丘 = 勝田台(解散)

- ・会費 = 30,000円ぐらい(アルコール代別)
- ・申し込み = 5月19日例会で1万円をそえて会計に申し込み、または直接事務局長へ
- ・お友達をどうぞお誘いください

### 7月15日(日) 例会

- ・午後1時半～
- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・情報交換、研究分担・資料学習ほか打合せ
- ・白井家文書まとめ

### 8月19日(日) 例会

- ・午後1時半～
- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・学習会 「史談八千代」原稿打合せ
- ・郷土史研通信 59号発行

## 報告

### 4月15日(日)

### 平成19年度定期総会と会員発表会

盛会のうちに終了しました

- ・午前10時～12時
- ・八千代市立郷土博物館にて
- ・34(他に委任状7)名の会員(現在63名)参加
- ・会長挨拶「郷土史研究者のための提言-地域史のマトリックス-」のあと、総会議事として19年度の事業計画などを決めました。
- ・今年度会費は3000円に決まりました。(未納の方は、次回例会時に納入、または会計の園田さんへお送りください)

午後は調査報告&情報交換として

- ・会長による博物館常設展示解説と「八千代の入定窟」についての調査報告
- ・平塚会員から「吉橋霊場振興会」への呼びかけ
- ・関和会員編集協力による小冊子「東京湾から印旛沼まで-わたしのエコウォーキング」の紹介と配布
- ・小林千代美会員の著書「あばれ沼と蛇の食」と、同名の講演会(4/21 郷土博物館にて)の紹介などの情報提供がありました。

### 2月25日(日) AM 拡大役員会

- ・午前10時～12時
- ・市立郷土博物館にて 16名参加。
- ・3月18日の歴史散歩の詳細な予定、平成19年度事業、大和田新田資料学習の今後の課題などを打ち合わせました。

### 2月25日(日) PM 例会

- ・午後1時～4時半
- ・市立郷土博物館にて 20名が参加
- ・大和田新田「白井家」文書の全体学習
- ・新年度へ調査研究課題の検討
- ・「郷土史研通信」57号発行

3月18日(日) 例会報告

歴史散歩 木下のまちかど博物館めぐり  
成瀬 摩希子

3月18日、27名の会員が参加し、歴史ある印西市木下・六軒地区を巡る見学会が行われた。地区の史跡や古建築を「木下まち育て塾」の皆さんに案内して頂きながら、塾による市民の活動についても学んだ。木下は、江戸～大正期利根川の水運の要衝として栄えた街で、現在も残る蔵や町屋が「木下まち育て塾」の活動により、修復保存がされ、「まちかど博物館」として公開されている。当日は本来公開日ではない蔵なども特別に開けて頂けて、内容の濃い見学となった。

JR 木下駅に降り立てば、右手に雰囲気のある川村煎餅店の店舗が見える。帰りには買って帰ろうとまず決意すること間違いなし。

10時木下駅をスタートし中央公民館にて資料配布と説明を受け、六軒川沿いを歩いて瀧田まちかど博物館へ。(筆者は出遅れ、ここで本体に合流でした。「木下まち育て塾」の皆様には大変ご迷惑をお掛けしました。お詫び&お礼を申し上げます。)ご当主や色とりどりの揃いの法被で「木下まち育て塾」の皆さんが出迎えてくれた。ここは江戸時代後期から塩や油、煙草を商っていた商家で現在でもガソリンスタンド。明治後期の土蔵が2棟立ち並び、古い看板や塩・煙草関連の資料、戦前の教科書など貴重な資料の展示がされている。



中州の町、六軒と木下の河岸を巡る騒動の話の伺いながら蔵島神社へと向かう。六軒の開拓時、宮島家が安芸から勧請したと伝えられる。弁天川沿いを利根川方面へ。昭和31年に完成の手賀排水機場から、その工事の際に土中より発見されたお稲荷さんを祭る干拓稲荷にお参り。利根川の土手沿いを行き、土手にあった木下河岸跡の説明板の絵図のように筑波山と富士山を遠望した。物資の流通や鹿島香取への参拝客で賑わった河岸の名残はないけれど、見晴らす景色は今も同じとを感じる。昼食前最後に山根山不動尊に参拝。不動堂に掛かる額は「浅草睦会」寄進。参拝者が広域から訪れた事が分かり、木下の繁栄振りが思われる。

かつては旅籠だった銚子屋にて昼食。明治時代の蒸気船の繁栄、蒸気船導入を行った地域の名主吉岡家の珍しい蔵の棟札の話、そこから判る家族の話など興味深い話

などを拝聴する。この吉岡家の蔵は「木下まち育て塾」と東京電機大学とが2年がかりで修復し、「まちかど博物館」の一つとして公開されている、午後最初の見学地。

蔵の1階には木下を描いた浮世絵などが展示され画中に吉岡家が見える。床の一角を切り取って蔵の下の様子が見れるようになっていた。湿気取りのための貝殻がびっしりと敷き詰められている。昔の人の知恵を教えて貰った。2階には説明を受けた珍しい棟札。当主から子供たち祖母までの家族の名前と年齢が書き記されている。必見の品。お庭には貝化石灯籠と水天宮。先ほど1階で見た絵図にあった水天宮がこれなのねとちょっと感慨深い。絵図には「水天宮安産膏」の広告(?)が載っていて木下の隠れた名産だったのかも?などと想像を巡らせていたのだった。



蕎麦屋の柏屋など古い町並みを眺めつつ千葉県有形文化財で、永仁五年(1297)銘の銅造十一面観音像が安置されている上町観音堂に向かう。三叉路に位置し元禄期などの古い道標も建っている。最後に「武蔵屋まちかど博物館」を見学。ここは伝統的な町屋建築で、やはり電機大とまち育て塾で、昨年修復されたもの。明治末～大正の堤防改修時に利根川堤から現在地に曳き屋をして来たという。江戸時代の武蔵屋は、水門番を業とし、後に旅籠を営み、明治時代、大いに繁栄していたという。当時の帳簿類なども見学できる。16時再び駅へと戻る。ここでまち育て塾の皆さんとはお別れ。見学地はもちろん途中の道々でも、ちょっと質問すれば、すぐに返事が返ってくるという感じで、塾のみなさんがいかに普段から地域の歴史を研究し、文化財の保護活用を目指しているかが伝わってくる見学会だった。

これからも益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

最後のお楽しみ皆でお煎餅を買いに行った。お店の扉を開けると炭火で手焼きの香ばしい匂いが漂っていた。





## 「和國屋の道標」が芝山に

佐久間 弘文

市民に親しまれていた大和田新田の「米本みち」入口に建っていた「なりたみち道標」、現在は道路工事のため市郷土博物館に移されています。建立した品川宿の「和國屋」の調べが続けられていますが、和國屋銘の道標が芝山仁王尊（芝山町）にもありました。脇にある説明板には以下の記述があります。

『酒々井の米屋旅館の敷地内にあったのを昭和 34 年に移建したもの。台座には「品川宿和國屋」、石柱には「東京駒込肴町石屋八右衛門再建 明治十六年三月」とある。江戸時代後期に仁王尊信仰は隆盛期を迎え、江戸の民衆が多く芝山に参詣した。その際、順路は佐倉から酒々井宿に至り、一泊の後高松（富里町）を通過して芝山に向かったという。現在もこの道は残り、酒々井、八街、富里、芝山を結んでいる』

石屋の八右衛門は江戸の三大石匠の一人で酒井八右衛門の子孫、都内各地に井亀泉(せいきせん)の名で石碑が建っているそうです。酒々井町の旧成田街道にも、明治 24 年に八右衛門が奉納建立した巨大な「成田山永代護摩木山」石碑が建っています。300 坪余の土地と松・杉などを奉納したとあります。



## 高津観音堂墓地相続登記に参加して

斉藤 正一

高津観音堂裏に高津地区 53 軒で所有する共同墓地があります。すなわち八千代市高津字堂の下 1324 番、墳墓地 515 m<sup>2</sup> (5 畝 6 歩 = 156 坪) がこれで、私の母親の祖父岩井作蔵の持分は 53 分の 1 (約 3 坪弱) 登記簿には明治 20 年代ごろの各家の戸主 53 名の氏名が記された状態で、その誰もが名義の変更 (相続登記) を行っていませんでした。作蔵は安政元年 (1854) に生まれ、大正 9 年 (1920) に死亡しています。この共同墓地は、昔の土葬時代のまま殆ど手を加えられることなく現在に至っております。

昨年、墓地整備委員会が組織され、計画の概要が定まり動き出しました。53 軒全戸が 110 年前のご先祖様の名

義から現在の適法な墓地承継者に登記名義を書き換え、各自の持分を観音寺に寄付のうえ、観音寺名義に書き換えることになりました。大部分の家が当時から 4 代目にあたり、私の場合では、岩井作蔵 - 廣松 - マサ - 正一ということになります。なお法定相続人は合計 500 人を数え、全ての印鑑証明などを集めたことになりました。

本年 3 月 3 日、この墓地整備の完成式典と、同時に高津観音堂の改修落慶法要が執り行われました。



## 東国中世考古学研究会第 3 回研究大会に参加して 「中世地下式坑」とは何か

藤 由美

2 月 4 日 (日)、アミュゼ柏で開かれた東国中世考古学研究会第 3 回研究大会『「地下式坑を考える」 - 地下式坑の全国集成とその検討 -』を村田会長と聴講してきました。

地下式坑とは、井戸状にまっすぐ 2 ~ 3 m 掘り下げたたて穴から、横に部屋(地下室)を作るもので、墓とも貯蔵庫とも言われ、用途は解明されていない遺構です。

千葉県では 280 遺跡 2100 基と全国で最も多く、下総台地の関東ローム層に展開し、関東全域に広がる分布がみられ、時期は 15 世紀半ば ~ 16 世紀前半に集中しているとのことでした。

八千代市内でも、高津新山遺跡、井戸向遺跡、吉橋の渋内遺跡から多数見つかっていて、私も 2006 年 10 月、村田会長に同行して、八千代市内の中世古城跡を探索した際、吉橋城跡貞福寺の西側の畑の縁で藪に覆われた未調査の地下式坑を見る機会がありました。落ちると危ないので、バリケードのウマで囲ってありましたが、不気味な穴でした。

第 3 回研究大会では、やはり、地下式坑の機能について、地下式葬送施設と貯蔵施設の二つの説をめぐる論戦が中心でした。

私は地下式坑の実態に触れるまで、中世前期のヤグラの系譜につながる信仰施設 (墓を兼ねる場合もある) とも思っていたのですが、時期的に断絶があることや、掘立建物群などの多い墓域といえない場所での検出例から、生活関連の遺構とも感じました。しかし、芋穴のような農業生産に伴う貯蔵穴であれば、中世末から人の暮らしとともに絶えることなく近世に続くはずでした。

地下式坑は鎌倉公方対関東管領上杉の対立する 1438 年永享の乱以降、千葉氏宗家をめぐる争乱と 1538 年の第一次国府台合戦、1564 年第二次国府台合戦と激しい戦いに民衆も巻き込まれた時代に時期を同じくします。

この時代に限られた地下式坑について、民衆の自衛用シェルターではなかったかと、私は思います。戦乱の中で、焼き討ちや人狩りから逃れ、また一晩でも雨露がしのげる避難坑として機能したのではないのでしょうか。

千葉県では、北条氏による支配が広まるころに地下式坑は終焉を迎えます。そのころ城の造りが機能的な惣構えの大掛かりなものに改変されていく過程で作られなくなり、残った穴は、ゴミ穴や墓穴に、あるいは貯蔵用に再利用されたものと理解するのが自然だと考えるのですが、会場は、埋文関係の業界の専門家ばかり。とても素人が質問などできる雰囲気はなく、「地下式坑といった何？」というなぞを抱えたまま帰路につきました。

勝田円福寺の宝篋印塔と「漢字宝篋印陀羅尼」  
板倉 守

私が初めてこの境内に足を踏み入れたのは、今年の 1 月下旬のことである。きっかけは、入会してまだ日も浅い私へ、先輩会員の佐久間弘文さんから「入門コースに好個な対象なので、市内宝篋印塔の悉皆調査を一緒にやらないか」と声をかけて頂いたことによる。その頃、宝篋印塔に関する私の知識はごく一般的で且つ表面的なものでしかなく「日本では鎌倉時代が起源で、宝篋印陀羅尼経の経文を納めた塔」といった程度で、塔形の年代的考証や分布の特徴、陀羅尼経の関り方など知る由も無かった。

そんな私が円福寺の境内で初めて宝篋印塔に対面したとき、ほんの一瞬の間ではあったが、目前に迫る塔の姿に息を呑んだ。重厚な姿と、処々に苔むして黒ずんだ石の肌色の重さに、圧倒された。塔の相輪上部が欠損していたが、それは永年の風雪に耐えてきた証左で、象徴的な姿でさえある、と思った。「寸法を取ろう！」早くも塔全体のスケッチを終えた佐久間さんからの声で、私がコンベックスで塔を計測、「基礎高は 85cm」などと読み上げ、佐久間さんが記録する。計測が終了すると次は最も根気を要する陰刻文字の判読だ。多くの塔の外面には宝篋印塔陀羅尼経の一部、梵字や種子(しゅじ)、施主、戒名、年号や干支、日付、月輪、など様々な文字が刻まれているが、古い塔ほど風化の影響が深刻で判読が困難であった。

悪戦苦闘を繰り返しつつ、私達は市内の七寺院と、九塔の基礎調査を短期間でこなした。ただ、円福寺宝篋印塔の基礎部三面にぎっしり刻まれた漢字だけは、他寺の塔の陀羅尼経とは異なった字体が使われていて、難解のまま手詰り状態に陥った。さすがの佐久間さんも「これは印経だろうか？」と困惑気味なメモを下書き資料に添えてこられた。そこで、当研究会の小菅会員の仲介で入

手、かねてより調査に活用させて頂いていた房総石造文化財研究会の西岡宣夫氏執筆の論文「石塔に刻まれた宝篋印陀羅尼経について」のほか、サイト検索で得た資料等を再精読した結果、私達は僅かな糸口を手繰り寄せる幸運に恵まれた。

宝篋印塔としての成立要件は、書写された宝篋印陀羅尼経が塔に納められているか、または経文の一部が塔の外面に刻まれることが原則であるが、この宝篋印陀羅尼経の内容は概略以下の通りである。

『仏陀が弟子達と無垢光明という婆羅門に招かれて赴く途中、朽ち果てた塔があり、仏陀が近寄ると大光明が放たれ[善哉善哉釈迦牟尼]の声がした。皆、大いに驚き、仏陀に問うと、[これは大全身舍利が積聚した塔で、一切の如来の心陀羅尼印法要が収められている]と答えられた。そしてその陀羅尼の功德が甚大であることを説き、宝篋印陀羅尼を口授された。それから仏陀は皆と婆羅門の家に行き、供養を受けられた後本拠に還られた。皆は大歡喜し、信授奉行した』

資料によれば宝篋印陀羅尼経には、上述の下線で示した部分が「音写漢字または梵字」で現わされ、それぞれが「漢字宝篋印陀羅尼」、「梵字宝篋印陀羅尼」として存在すると述べている。早速く円福寺宝篋印塔基礎部の漢字と、サイト検索で得た宝篋印陀羅尼経資料を照合してみたところ、ほぼ合致した。私達は、塔に刻まれた漢字群は恐らく「漢字宝篋印陀羅尼」であろうと推定するに至った。

後日、調査記録の写しを小菅会員経由で西岡宣夫氏に郵送して確認をお願いしたところ、「漢字宝篋印陀羅尼の全文で間違いはない。県内で初めてで、大変珍しい例だと思う。」との回答を頂いた。勝田円福寺、この寺とこの地域にまた一つ、新たな魅力が追加されたことを心から喜ぶたい。

稿を結ぶにあたり、房総石造文化財研究会の西岡宣夫氏、当会の小菅会員、ならびに佐久間会員の懇切なるご指導とご協力に、御礼を申し上げます。



## 宝篋印塔のルーツ

藤 由美

板倉守会員が、宝篋印塔について市内の七寺院・九塔を調査し、勝田円福寺の宝篋印塔が漢字宝篋印陀羅尼の全文が刻まれた県内でも大変珍しい作例と今回報告されたことは、地元の円福寺のことであり、また私もこの塔のシルエットが好きで、風景写真としてHPに載せている宝篋印塔のことでしたので、(編集者の「特権」で一足先に)うれしく読ませていただきました。

江戸時代の宝篋印塔は、円福寺の塔のようなつくりの塔と、2004年5月に間宮家の墓地調査で見たような隅飾が外反し相輪部が異常に長く、背の高い塔があります。前者は大慈恩寺(大栄町)松虫寺(印旛村)など、境内の目立つところに信仰的シンボルとして、裾広がりに積まれた基壇上にすくくと立っていますが、後者は故人を供養する墓塔として造立されることの多いようで、竜角寺(栄町)境内や有力な家の墓所にはトーンポールのような長い形の塔がずらりと並んでいます。

宝篋印塔は、板倉会員の報告にあるように、一切如来の全身舎利の功德を集めた呪で四十句からなる『宝篋印陀羅尼』を納めたことに由来する塔ですが、わが国では鎌倉時代、忍性により大蔵派石工の技術で大和額安寺、生駒の竹林寺近くの興山往生院に、さらにその後忍性の足跡と共に箱根町精進池畔やつくば市の三村山頂などに造られ、供養塔としてひろく普及していったと思われ、身近の例としては西福寺(船橋市)の宝篋印塔があります。また私の実見した長野県長門町仏岩頂上の応長元年(1311)の銘の宝篋印塔は、塔身には四方に四仏の種子、そして宝篋印陀羅尼全文を梵字で彫ってあって、往時の信仰心の強さを物語るものでした。

額安寺宝篋印塔に遡る事例として、中世都市研究会2004鎌倉大会で山川均氏(大和郡山市教委)は1230年代に造られた旧妙真寺と高山寺の塔を紹介し、この塔のさらにルーツとして、中国五代末期の顯徳二年(955)呉越王銭弘俶が、八万四千基の金塗小塔を造立して諸国に分け日本にも将来された銅小塔をあげておられました。

3年前の国立東京博物館で開かれた「中国国宝展」で、この銭弘俶塔と、これより大きめで隅飾りなど細部の形式の明瞭な宝塔を見ましたが、まさに「宝箱」という名のごとく華麗に装飾された美しい器でした。

その後、山川均氏が中国泉州での調査をもとに報告された講演等によれば、日本の初期宝篋印塔は、明恵の髪爪塔といわれている梅尾高山寺宝篋印塔が1239年造立という年代のはっきりしている最初の塔で、これに類似した妙真寺の「鶴の塔」は四隅に鳥(ふくろう)があり、この塔の構成要素が中国泉州の開元寺にあった塔に類似しているとのこと。石造文化が盛んな泉州には、そのほか11世紀の巨大石造橋や港を見下ろす山の頂に大きな宝篋印塔が建立され、それらは、塔身には本生図や仏像、その隅にカルラ像、隅飾に仏伝、基礎に四仏や三仏が彫刻された華麗なデザインで、そのルーツは金属製にもとめられます。さらに山川氏の報告で興味深かったのは、

高山寺の明恵と交流があった證月房慶政が1217年に泉州に滞在し、ペルシャ語の四行詩を書いてもらって明恵に送っていること。慶政は泉州の開元寺に滞在し、その宝篋印塔を拝んでいたはずで、また1232年になくなった明恵の百日供養の導師を慶政が務めていることから、高山寺塔の建立には慶政がかかわっていたということですから、

13世紀後半からは、興山往生院、額安寺などの宝篋印塔が忍性など律宗教団によって作られて、その後全国に普及していきますが、そのルーツは11~12世紀、泉州に栄えた石造文化が入宋僧の記憶の中にあっただけのことです。ただ、日本で普及したのは、ごてごてした彫刻のないシンプルなもの。五輪塔に見られるように、幾何学的なデザインに、なにか宇宙観のような哲学的な思想を表現しようとしたのかもしれない。そしてそのたどり着いた最高傑作が箱根の宝篋印塔のように思えます。

## 平野仁蔵さんの百歳を祝って

4月15日総会の後「百賀の平野さんを囲む夕べ」が開かれ、4月4日にめでたく百歳を迎えられた平野仁蔵会員の百賀を大勢の会員とともに祝いました。



その際、平野さんに「百歳のご感想を」とお願いしたところ、ユーモアとウィットにあふれた「感想」をいただきましたので、ご披露します。

## 百歳の感想

平野 仁蔵

齢百歳と言うと人は皆羨ましく思うだろうが、百歳の本人はそれとは全く正反対、百歳は地獄である。白毛頭の中はジュースの空き缶を蹴飛ばした時のようにカンカラカン、物忘れ甚しく、午前午後の区別もつかず、眼は霞んで臃、鼻水絶え間なく、耳は遠いが、小便是近く、総入れ歯ガチガチの口からはよだれがポタリポタリ。肩、腕など動かす度にギンギン痛む。

やっと立ち上がれば足許ぐらぐら定まらず恰も震度三~四度の地震の如き心地。

皆さん、餘り長生きはせぬ方がいいですよ。兼好法師は徒然草の中で老いて醜くなって死ぬより、人に惜まれる位の死に方が良い、と書いてあったと思います。正にその通り。

蔵さんに頼まれて何か感想を、というので兎に角、文字だけは四角の枠に納めたものの、感想じゃなくて乾燥しきったカサカサの頭の中、何が何だか分からないもの、御免なさい。

= 編集後記 =

佐久間・板倉氏の報告に、わが眼が節穴だったことを痛感しました。何事も問題意識をもって見るのが大切ですね。

By. 藤 sawarabi-y@nifty.com